

平成 21 年 4 月 23 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2006～2008
課題番号：18720008
研究課題名(和文) ドイツ近世の論理学、言語思想、知識論の思想史的解明と情報学的観点からみた諸問題
研究課題名(英文) Historical investigation of Logic, Language thought and knowledge theory in Germany at the early modern age and various problems of seeing from informatics viewpoint
研究代表者 藤本 忠 (FUJIMOTO TADASHI) 龍谷大学・文学部・講師 研究者番号：40411277

## 研究成果の概要：

ドイツ近世思想、特に 18 世紀の哲学思想に関しては、カントとドイツ観念論を中心とした思想史的な見方が強い。今回の研究は、そうした見方に対して、ランベルトの思想を通じて新たな視座を提供することが目的とされた。ランベルトはカントと同時代に生きたが、ランベルトの哲学には、ライプニッツの思想の重要な側面、すなわち概念結合術を展開し新しい真理を発見するという側面が含まれていることが明らかにされた。またランベルトの思想には、現代の論理思想、言語哲学のさきがけであるウィーン学派やクワインとの親近性があることについても新しい知見が得られた。さらに、情報学的観点からは、時間の概念が確率論的問題との関係から解明された。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	1,100,000	0	1,100,000
2007 年度	1,300,000	0	1,300,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	180,000	3,180,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：西洋哲学、情報学的知識論

## 1. 研究開始当初の背景

西洋近世哲学研究、特に 18 世紀啓蒙期のドイツ思想研究において、カントを中心とした意識論的哲学研究の潮流が強く、ランベルトなどのカントとは異質の論理的な哲学・思想の研究はかなり立ち遅れていた。

これまでのドイツ近世哲学の研究は、いわゆる、ドイツ近世哲学の古典文献学的側面に

限られ、また、哲学的側面からみて、一般に、主流と位置づけられるライプニッツ哲学、カント哲学、そしてドイツ観念論に重心をおいたものであった。私自身は、これらの哲学における存在論的論理学の役割を、カントの『純粋理性批判』『超越論的論理学』の分析や、ヘーゲルの『大論理学』『本質論』、さらに、シェリングの『超越論的観念論の体系』

における「自然概念」などを研究する過程で明らかにしてきた。

しかしながら、こうした主流的哲学には、ライプニッツを除いて、一般的に、言語と論理、あるいは経験的知覚に関わる視点が欠けている。だが、主流的哲学において十分に語られてこなかったにしても、こうした視点は、実は、ドイツ近世思想の流れのなかで、傍流とみなされている哲学に存している。それは、同じくライプニッツ哲学を源流とし、ランベルト哲学を経て、フレーゲの論理学、ウィーン学派へといたる流れである。この思想的潮流は、これまで、哲学史的な研究課題として、あまり取り上げられてこなかった。ライプニッツからカントを経てヘーゲル（その先には現象学も位置づけられるが）へといたる哲学は、1. ハッキングの言葉を借りれば、知識や認識の起源や獲得の方法、知識の領域の解明を論じるために、「観念」や「表象」、「意識」といった言葉の分析と適用に力点を置いてきたように思われる。つまり、これまでドイツ近世から近代にかけての哲学は、カントを中心とした意識論的哲学とみなされ、フレーゲ以降の論理学、言語哲学との断絶は強調されても、その連続性は殆ど主題として取り上げられてこなかったのが、研究開始当初の背景である。

## 2. 研究の目的

ランベルトの論理思想の研究を通じて、カントからドイツ観念論に至るスタンダードな思想史的視座に新しい見方を提供し、ドイツ近世思想のもう一つの潮流としての論理学思想の姿を明らかにすることが目的である。ひいては、20世紀の論理学思想、そして情報学との関連をはかることを目的とする。以下、詳細を述べる。

本研究の目的は、「1. 研究開始当初の背景」で触れたことを踏まえつつ、近世のドイツ思想のすべてが、意識論的哲学とみなされてきたという観点に、異なった見方を与えることであり、また、現代の情報学、認知科学（知覚論）言語哲学との関連において、これまで傍流とみなされていたドイツ近世哲学のもう一つの流れが、今日の哲学、科学一般に対して重要な意味を内包していることを明らかにすることにある。

まず、<sup>1)</sup> について。これまで近世ドイツの哲学史は、ヘーゲルの「哲学史」を模範とし、新カント派以降も、近世ドイツ思想の頂点にヘーゲルを位置づける論述に終始してきた。これは、歴史哲学的観点がヘーゲルによって作られた限り致し方ないことであったが、今日、未だに、カントとドイツ観念論をライプニッツ以降の唯一の正当な思想的流れであるかのように論述されていることが多い。そ

のため、フレーゲ以降の論理学と言語の哲学、科学の哲学が、今日の英米の分析哲学の起源とされ、ドイツ近世思想と無関係な哲学として、紹介されている。だが、いうまでもなく、フレーゲ哲学、ウィトゲンシュタイン哲学、ウィーン学派は、ドイツ、オーストリアという大陸の哲学の中から生まれ出てきたのであり、その成立史、影響史を考える上で、ライプニッツからヴォルフにいたるドイツ学校哲学の伝統は無視できないはずである。カント、ヘーゲルという哲学者に隠れて、主流とされてこなかったランベルトから後期ヴォルフ学派、あるいはバルディリの論理学、フリースの哲学などの研究は、フレーゲ以降の現代哲学の起源との関係、そしてある種の連続性を考えていくために、今後、積極的になされなければならない。これら傍流とみされた思想家の邦訳は、殆ど存在しない。

ドイツ近世の論理思想の流れをフレーゲ以降の現代哲学へと結びつけることは、今のドイツ近世哲学研究に、新しい視座を与えるために是非とも必要である。

次に<sup>2)</sup> について。<sup>3)</sup> は、古典文献学、哲学史的な側面に限る研究であるが、実は、ランベルト哲学を中心とするドイツ近世の論理思想には、現代の英米の哲学者、例えば、クワインなどの哲学、さらには、情報と生命の間のシステム論を考える上でのヒントが多分に隠されている。ランベルトの哲学には、言語の階層性と、真理の言語の規準が、極めて明快な形で設定されており、カルナップをはじめとするウィーン学派の言語、科学哲学との連関が見て取れる。また、ドイツ観念論のシェリングには一部見られるものの、主として論じてこられなかった、言語と論理、知覚と経験の問題は、ランベルトのある種の確率論的知識論に散見され、これは、ヒュームとの親和性が見て取れるとともに、現代の情報学、数理情報学を、統計学的認識論との関係で考えるとき、極めて重要なヒントを与えてくれるものと思われる。ランベルトは、円周率が無理数であることを証明するなど、数理科学の分野でも多大の業績を残してきた。この点で、数学者でありかつ哲学者でもあったフレーゲやラッセルらと同じような世界観を持っていたことも推察できる。

現代の哲学は、諸科学との間での学際化が進み、総合化している。こうした状況の中で、哲学は、今後、情報という概念の中で様々な問題と向き合っていかなばならない。その場合、哲学固有のアプローチが必要になる。色々な切り口があるろうが、こうした学際化の中での哲学固有の仕事は、科学諸理論の原理的限界と地平を見定めること、そして、諸科学のもつ言語の文法や規範と階層を論理的に明確に示すことにあると思われる。

昨今の脳科学にしても、その思考のシステ

ムを論じる際に、量的な規定から質的な言説への飛躍が甚だしい。その結果、観念や意識といった概念がかえって乱用され、科学的アプローチが、いつの間にか隠喩的、独断的言説に取って代わられてしまう傾向がある（最近の脳科学における「クオリア」の問題は、哲学的アプローチの必要性を示している）。こうした中で、私は、これまでも、質と量のカテゴリーの相違といった側面に注目し、科学的量世界の言説がいかんして質的言明へと変換しうるのか、その限界を考えてきた。今後、カントやドイツ観念論においても言語の問題として究明されてこなかった、こうした量と質といった異質な言語の間の繋がりを、情報と知覚との関連の中で、厳密に進めていく必要があるだろう。

以上、本研究は、ドイツ近世の底流に流れる論理思想、言語哲学の解明を主題としつつ、それにとどまらない、新しい哲学の役割を提示する学際的研究でもある。また、本研究は、私が現在進めている「情報の哲学」、「情報の存在論」、「情報知識論」、「情報と言語と脳」に関する研究の基礎的部分をなし、今後の研究進展のための重要なステップをなすことも同時に目的となる。

### 3. 研究の方法

ランベルトの『新オルガノン』の分析を中心に、カントやその他のドイツ啓蒙期の思想（マイヤー、バウムガルテンの思想など）との比較検討を行う。また、情報学的観点からは確率論的手法を用いて時間の概念を明らかにする。

本研究には、古典文献学的側面と現代の論理学や科学、とりわけ情報科学の側面からの知識、方法論が必要となる。前者の側面からは、ドイツ近世思想における論理思想を時代ごと、思想ごとに区別して研究していかねばならない。ランベルトの主要著作『オルガノン』を中心に、ドイツ学校哲学の哲学者であるヴォルフやバウムガルテン、マイヤーの論理思想、および、カント哲学との関係について究明をすすめる。特に、ライプニッツからランベルトへ至る思想史的究明を中心とする。

後者の研究に際しては、現代の情報学と知識、認識の問題の解明が必要になるが、脳科学や情報処理認知科学の問題点を言語哲学、現代の論理学の側面から究明する。研究期間にわたり、基礎作業が中心となる。例えば、ドレツキ以降の情報学的知識論をウィーン学派以後の言語哲学の中に位置づけつつ、この方向から、近世ドイツの知識論に対する批判的な研究を行う。そして、可能であれば、その解析の中で、ランベルトの業績を浮き立たせたる。

### 4. 研究成果

- (1) ランベルトの思想はカントとの比較においてより鮮明に理解される。とくに、ランベルトの概念結合術的発想は、ライプニッツの思想を継承するものであることが明らかにされた。また、彼の目指した学問観は、カントとは異質であり、現代の複合領域的科学が目指すべき方向を示唆しているものと思われる。
- (2) ランベルトの思想を現代の哲学との関連から見ると、カルナップを中心とした論理実証主義やクワインのホーリズムとの類似性が見て取れる。
- (3) 情報学との関係については、十分な成果が挙げられたとはいえないが、確率論的問題の基礎としてファインマンの経路積分と時間の関係について結果を得た。カントとランベルトの思想の差異が時間概念をめぐる点にもあったことを考えると、意味のある成果であったと思われる。

以下、年度の区切りごとの成果について述べる。

2006年度から2007年度にかけては、古典文献学的側面と現代論理学や科学、とりわけ情報科学の側面から、知識論とその方法論に関する研究を軌道にのせるための作業を行った。前者についていえば、ランベルトの主要著作『新オルガノン』を中心に、ドイツ学校哲学の哲学者であるヴォルフやバウムガルテン、マイヤーの論理思想、および、カント哲学との関係を整理し、ライプニッツからランベルトへ至る思想史的究明を軸に研究をすすめた。また、ランベルトの著作とそれに関連する二次文献を収集し、彼の思想形成が、どのような時代背景と知識論の下でなされたかについて、資料を精査した。科研費予算において消耗品の経費を使い、こうした資料、著作を出来る限り集めた。また、ランベルトの『新オルガノン』の部分訳とともに、マイヤーの『理性論綱要』の翻訳にも着手しはじめた。

さらに、フレーゲからラッセル、クワインへといたる思想史の流れを解明し、脳科学や情報処理認知科学の問題点を探る研究をすすめている。特に、ウィーン学派のカルナップの思想にヒントを得て、近世ドイツの知識論に対する比較思想史的視点を構築するように努めた。加えて、カントの「超越論的反省」の理論に関する論文を執筆し、その中で、近世知識論と現代科学哲学との間にある認識論的問題の差異を浮かび上がらせるよう努めた。

2007年度から2008年度にかけては、次の点に絞って、研究をすすめた。

まず、ランベルトの哲学、特に『新オルガノン』における「真理論」と「仮象論」を軸に、哲学における数学的方法と哲学的方法の差異を、カント哲学との対比において捉えた。カントは『純粋理性批判』『超越論的方法論』において、哲学的認識と数学的認識を「直観」思想に基づいて明確に分けているが、ランベルトはそれとは逆に、数学的認識、物理学的認識を哲学的認識と接続させようと試みている。カント哲学には、一般に、言語記法についての洞察がないといわれているが、この点も、ランベルトとの比較において重要になる。また、カントの認識批判の論理、すなわち超越論的論理学の論理性の考察を進める中で明らかになってきた論理の自己言及性についても、ランベルトと対比することは興味深い。ランベルトは、認識論的自己言及性という問題を、言語の階層性によって回避する。また、ランベルトは、認識論的問題についても、認識言語の計算可能性を考慮に入れている。

また、補足的研究になったが、ランベルトの言語、論理思想をカントとの比較において考えるとともに、ヘーゲルに影響を与えたといわれるバルディリのテキスト『論理学の基礎』を読み進めた。ランベルトからバルディリへいたる思想史のダイナミズムを、カントとドイツ観念論との対比において、再解釈する基礎は築けたと思われる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

- 1 藤本忠「経路積分と時間表示の関係について-積分表示からみた量子物理的時間論-」、『龍谷大学論集 第473号』、48～61ページ、2009年。査読なし
- 2 藤本忠「ランベルトとカント - 往復書簡にみる哲学観の差異」、『龍谷哲学論集 第23号』、1～30ページ、2009年。査読なし

- 3 藤本忠「「純粋理性の批判」について-カント哲学における批判と認識能力の構造-」、『龍谷哲学論集 第22号』、1～30ページ、2008年。査読なし

- 4 藤本忠「超越論的反省の理論 カント哲学における超越論的論理学をめぐる一視角」、『龍谷大学論集 第468号』、26～59ページ、2006年。査読なし

#### 6. 研究組織

##### (1)研究代表者

藤本 忠 (FUJIMOTO TADASHI)

研究者番号：40411277

##### (2)研究分担者

( )

研究者番号：

##### (3)連携研究者

( )

研究者番号：